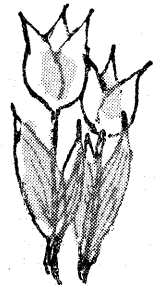


# 「受け入れるということ」を考える



— 「母なる館グリーン・ノウの物語」を媒介として —

本田 和子

四月は、スタートの季節である。新しい子どもたちが、幼稚園の門をくぐる。一人々々がそれぞれに自分の歴史を背負い、自分の世界をもった子どもたち。四月の保育者の関心は、この子どもたちとのようにして出会い、この子どもたちをどのように受け入れていくかという、その一点に集中するといえよう。

四月の保育雑誌を賑わすのも、この入園期の問題である。子どもたちがいかにして園の生活に入りこんでいくかが考察され、保育者の受け入れ方がさまざまに論じられるのである。

ところで、子どもが新しい場に「入る」ということ、そして、それを「受け入れる」ということは、単に入園期だけの問題に限らないのではないか。毎日の生活の中でも、子ども

たちの前に、「入る」ときは、常に訪れる。たとえば、新しいグループに「入る」、遊びに「入る」、あるいは新しい成長の段階に自ら「入る」瞬間もあるにちがいない。

子どもは、というより人間は、常に「入る」という課題をかかえているし、同時に、「入ろう」とするものを、「受け入れる」という課題をかかえていると言えないだろうか。

ここでは、一つの児童文学作品を媒介としながら、「受け入れる」ということを考えようと思う。



「グリーン・ノウ物語」は、英国の児童文学作家、L・M・ポストンによって、一九五四—一九六四にかけて発表された。「グリーン・ノウ」とよばれる神秘的な館（まがた）をめぐる生起するさまざまな事件や、冒険を描いたファンタジックな作

品である。

「グリーン・ノウ」は、九〇〇年以上も昔から存在し続けている古い館であった。館の主人は、オールドノウ夫人という年齢もわからぬほどに年老いた一人の女性である。この館にはさまざま不思議が息つき、この夫人はさまざま神秘を日常としている。

さて、「グリーン・ノウの子どもたち」と題された第一作では、ある年の冬、クリスマス休暇をすごしに、曾孫のトリーがこの館を訪れる。トリーの家族は遠くビルマに住んでいるため、彼だけが英国で寄宿生活を送っている。少年が帰省するには、ビルマはあまりにも遠方である。トリーの休暇はいつも淋しかった。しかも、彼は実母を早く失っていた。継母も悪い人ではないが、少年の孤独を真にいやしてはくれない。

ところで、今度は、大おばあさんのオールドノウ夫人からの招待を受けたのである。大おばあさんは「グリーン・ノウ、あるいはグリーン・ノア」とよばれる古い館に一人で住んでいる老婦人である。トリーは、好奇心と期待と、そして、少なからぬ不安をいだきつつ、この館にたどりついたのであった。

トリーは、ここで、さまざま不思議を体験した。何よりも、「まぼろしの子どもたち」すなわち、三〇〇年前にこの館の住人であった三人の子どもたちと友人になり、楽しいクリスマスを送ることができた。

すべてのものを、「各々そのあるがままの姿で」包みこんでいる古い館は、トリーの眼前に「不可視の現実」を出現させてくれたのである。

第三作「グリーン・ノウの川」では、両親や家族とちりぢりになった難民の子どもたちが、グリーン・ノウで体験する夏の冒険が物語られる。

第四作「グリーン・ノウのお客様」は、やはり、グリーン・ノウに招かれて休暇をすごしにきていた中国人の孤児ピンが、動物園を脱走したゴリラのハンノーと出会い、親子の情にも比されるような堅い友情に結ばれて、「本ものの三日間」を過ごす物語である。作者ボストンはこの第四作で、英国児童文学の最高の栄誉たるカーネギー賞を受賞している。

グリーン・ノウにおいて、現代を生きる一人の少年が、三〇〇年という時間のへだたりを超えて、過去の子どもたちと出会うことができた。また、国籍も生い立ちも異なった難民の子どもたちが一体となって一夏を楽しみ、さらに：人間と

動物という種のちがいを超えて、ゴリラと真の友情を結ぶことも可能だった。

この館は、「今」と「今でないもの」を出会わせ、「さまざま異なる人」を一体とし、「人間」と「人間でないもの」結びつけた。そして、それらすべてのものに真の安らぎを与える「永遠の和らぎの地」なのである。

作品中のことは借りれば、グリーン・ノウは、「誰もここではよそのものなんて思えない場所」であり、「本当の逃げ込み場所」なのである。女主人のオールドノウ夫人は、「ここでくらしたいと思うものには、自由にそうさせてやりたい」と断言している。グリーン・ノウの館は、すべてのものを「受け入れ」「つつみ込む」まさに、大いなる「母のふところ」なのだ。

そこで、このシンボリックな古い館「グリーン・ノウ」と、その聖性を代表する「オールドノウ夫人」とが、訪れるものをいかに「受け入れ」それらの人やものをいかに「和らげるか」というそこに焦点を当てて、若干の考察を試みてみよう。

グリーン・ノウの館に関して、作品中に次のような説明がなされている。

——トリーにとっても、ピンにとっても、今ではこここそが家だった。そして世界じゅうでいちばんすばらしい場所だった。ほかのどことも違っていた。なぜなら、たいていの家は、住んでいる人がいはい何もかもしめ出してしまい、ドアやカーテンをとぎして、野原のはてから吹いてくる冷たい風も近所の人のものめざらしそうな目つきも同じようにびしゃりとさえぎり、すべてをじぶんたちだけでひとりじめして、ぬくぬくとくるまつてくらすようにできている。ところが、グリーン・ノウはふしぎなことはいっぱいなのだ。ここはだれでもうけいれる。そしてこちよく楽しく、生き生きしている。だが、それだけではない。この古い建物の心はずむような形と色のうしろには、見知らぬ世界からの驚異がひそんでいるような気がする。この家はその見知らぬ世界とも仲よくし、りくつではわからないものだつてけつてしめ出そうとしていないようだ。——「グリーン・ノウの魔女」より

館は、合理的な判断だけですべてを処理しようとはしない。よくわからないものも、「わからないなりに」存在することを許す大きさを持っている。オールドノウ夫人の言葉にも、次のようなものがある。

——「こういう古い家では、いろんなことがよくわかつていると同時に、わからないこともあるんです」——「グリーン・ノウの魔女」より。

この館は、トリーにとってもピンにとっても、その他の子どもたちにとっても、この上なく魅力的な場所であった。外から見た家の形そのものも、子どもたちの心をひきつけた。それは、この上なく簡素でありながら、しかも変化に富み、四面がそれぞれ違った形をもちながら調和があった。グリーン・ノウの家は、「この世に生きてものごとを知るということの意味あいを、一点に集め、あたりに示している」のである。子どもたちがこの家を気に入り、この家を訪れることをうれしく思う気持ちの源には、こうした理解が漠然とはあるが、あったのである。

古い伝説めいたこの家には、「昇る太陽や沈む夕日、おとずれる月や去っていく月、さらには屋敷の上空をわたる傾いた星座などから、やさしさとうっとりするところがしたたり落ちて、しみこんでいる」のだった。

グリーン・ノウの館の中には、たくさんのもがおかれていた。建物と共に歴史を生き抜いてきたような古いものもあれば、夫人の蒐集になる洋の東西の珍しいものなど、さまざまであった。日本の細工物もあれば、中国の調度品もあった。中には、一体、それが何なのか、何の役に立つのか、すぐにはわからないようなものも、たくさん、まじっていた。

——家の中はふう変わりなものでいっぱいだった。旅行家の家はいつもこうなのだ。オールドノウ夫人自身のコレクションは主として絵と庭の鳥の巣であった。だがこの人は、家に「ふさわしい」と思ったり、家の中を豊かにすると思つたものはどんな集めた。じぶんが好きだからというだけでなにか買うようなことはけつしてなかったが、ほんとうの家庭にひきとってやることになると思ふものは大いに集めた。——「グリーン・ノウの魔女」より

それらの、一見、雑然とみえる蒐集物が、あるとき、ある人と出会って、いきいきと生命を持ち始めることがある。難民収容所に收容されていた中国人の孤児ピンを迎えたのは、大きな中国製のちようちんであり、中国製の陶器だった。ピンは、その陶器の茶わんに、失つた「母の面影」を見いだして驚く。

——それは薄い水色の茶わんだった。持つところはなく米つぶくらいの大きさの、うわぐすりのかかった卵形の窓がついていて、持ちあげると、その窓から光がもれて出た。「はじめのうちはまだふしぎな、幸せな気がしただけで、なぜだかわかりませんでした。でも、今やつとわかつたんです。ぼくがまだ小さかったころ、お母さんがこんな茶わんを持ってました。夢ではないんですね」

ピンは手をのぼしてその陶器にさわってみた。

——「グリーン・ノウのお客様」より

オールドノウ夫人は、次のように答える。

——「この家なのよ。いつもまるで偶然みたいだけど、でもたとえば、とつぜんこうしてあなたがやってくるでしょう。そうしてなんでもいいから見ていると、それがみんなあなたを、だれでもなくあなたを、待っていたように思えてくる。ほかにもそういうものがたくさんあるはずよ。この茶わんだってごくあたりまえの中国の茶わんです。中国のだからということは窓飾りがついているからだれでもわかる。けど、あなたにとっては、お母さんの茶わんになるんですよ」——「グリーン・ノウのお客様」より

ピンを歓迎するためにつるしてあった中国のちょうちんは、彼のそばにあって、一きわ落ちついた光をはなち、竹やぶの竹は、ピンがそこに立ったことよって、「本当に竹らしく」見え始める。

グリーン・ノウの館におかれたさまざまな「もの」は、平常は、誰のためにあるのか、何のために役立つのか、わからないような無駄な蒐集物に見える。しかし、誰か新しい人がこの館を訪れたとき、それらさまざまな「もの」のどれかがその人を迎え、訪れた人はそこに「わが家」を感じるのでは

る。そしてまた、「もの」もはじめて真の主人を得て、いきいきとその真価を發揮するのである。

それゆえに、訪れた人はその家に大きな「安らぎ」を感じた。

——家にはいると、玄関はたのしくみんなをつつんで、ほっとさせてくれた。そこはいつものように花や鳥の巣でいっぱい、電燈の明かりが鏡一面にうつり、それがつぎつぎと反射していた。テーブルの上には、植木ばさみや、かこや、本や、手紙など、ひょいとおいておけるもの、楽しいくらしの品じながいっぱいにちらかっていた。そして色ぬりの階段が「さあどうぞ」とでもいうように上へのびていた。——「グリーン・ノウの魔女」より

この古い館にあって、異なったさまざまなものが、それぞれ「あるがままの姿」で存在していた。東洋のものは東洋の姿のままに、魔法の跳梁していた時代のもはそのままに魔力を秘めて、それぞれにおかれていた。そして、一つ一つが「あるがままの姿」を許されていたからこそ、その本来の生命を失なうことなく、長い時代をいきいきと存在し続けて、いつか訪れるであろうおのれの主人を待ち受けていたのである。

そして、それらを「そのままに」抱き包んでいたのは、い

うまでもなく、館の女主人オールドノウ夫人であった。

——いいえ。わたしはなにかもそつとそのままにきてるの。どんなものでも、そこにあるままで、りっぱにお役目を果たしているのよ」——「グリーン・ノウの魔女」より

◆ ◆ ◆

オールドノウ夫人は、「どんな変わったことがおこつても静かに受け入れることができる」人だった。動物園を逃げ出したゴリラのハンノーですら、夫人の気持ちとしては、こばみたくないのである。「もし、ここにゴリラが逃げこんできたら」というピンの問いに、夫人は次のように答えている。

——「そうね、もしハンノーがここにいることが気に入って、だれにもいたずらしないようだったら、わたしはできるだけ長くおいてあげたいと思うくらいですよ」——「グリーン・ノウのお客様」より

トリーがはじめてこの館を訪れた夜、夫人は、窓という窓にはぜんぶあかりをともし、室内のろうそくを立てにもいっばいに火をともし、彼を迎え入れた。

——へやには、たくさんガラスのろうそく立てに、ろうそくがいっぱいともまれていた。そして大おばあさんがトイズランドに手をさしだしたとき、指輪にもろうそくの光がうつった。

「とうとう、かえってきたわね」

大おばあさんは、少年が前にすすむと、ほほえんでいた。トイズランドは、知らぬまに大おばあさんの肩にもたれかかっていた。なんだか大おばあさんをまえからよく知っているような気がした。——「グリーン・ノウの子どもたち」より

暖炉の中には丸太のまきぐくべられ、ほのおがゆらゆらあがっていた。

——トリーはいった。

「これぼくたちの火ですか？ あおう、つまり、ぼくたち二人の？」

「青い火があなたなので、オレンジ色がわたしのよ」

「ろうそくの火は？」

「みんな、あなたのもの」

トリーは、ちよつとためらつてから、とても小さな声でたずねた。いいだす勇気がなかったのだ。

「ここは、ぼくの家ですか？ いくらかでも」

——「グリーン・ノウの子どもたち」より

長い旅を経て、はじめての土地を訪れた少年は、老夫人のともした火と、笑顔と、「かえってきたのね」という言葉に迎えられて、この館を「わがもの」と感じたのであった。

ピンが夫人とはじめて会う場面は、次のようである。

——だが、小がらな年とった婦人が、待ってたわよと言うよう

に、こまかなしわを元氣よく動かしながらドアを開けたとき、ピンはとっさに思ったのだった。このひと、中国のおばあさんのようだ。そしてたちまちくつろいだ気分になった。——「グリーン

・ノウのお客様」より

グリーン・ノウの館は、すべてのものを包みこみ、和らげる「母のふところ」であった。石で囲われた安全な地、すべてのものが、そこでは真実に分らしく生きることできる「聖地」である。しかし、その館を訪れる人をまず抱きとめ、安らぎを感じさせるのは、この老夫人の存在であった。オールドノウ夫人は、まさに「母なる館」を代表する「大いなる母」なのである。

老夫人は、先にも触れたように、すべてのものが「そのまま」に存在し得ることを第一としていた。したがって、子どもは子どもとして、「子どもの思いのままに」行為し得ることを大切と考える。グリーン・ノウが魔女に襲われて危機におちいったとき、夫人は子どもたちに次のように言っている。

——「なんでもいいから子どもらしい遊びをして、知恵をみが

いておきなさい。あとからそれが必要になると思いますがね」

——「グリーン・ノウの魔女」より

夫人は、「ものごとはその人の考えにしたがって起こるものだ」と信じていた。そして、子どもの考え方を愛していた。なぜなら、子どもにとっては、世界中はすべて驚異と神秘に満ちていて、つまらないことなど起こり得ない。したがって、子どもが滞在するとき、この館には新鮮で驚きに満ちたことがらが起こるのが常であったから。

館の中に「何か」が起こるとき、夫人はいつも子どもらと感動を共にしようとした。ときには、大人の良識がわざわざいして、完全な共感が成立しないこともあったが、それはやむを得ないだろう。ひとたび、子どもらの提案を受け入れ、行動を共にしようとするとき、夫人のふるまい方はみごとであった。トリーよりもピンよりも子どもらしいといえるくらいに、活気があり、エネルギーに満ちていた。

——「さあ、わたしは生まれてから棒でものをたたいたことなんて一度もないわ。こっぴどくたいてやりたいものです」

じっさい、夫人はだれにもまげず強くたたいたし、おまけに正確だった——「グリーン・ノウの魔女」より

オールドノウ夫人は、「あたたかく受け入れ、抱き包む母」

であった。しかし、その「母」は、単にほおに微笑を浮かべ、腕を広げて待ってだけいる人ではなかった。子どもと一緒に棒をふるい、サンドウィッチをほおばり、まぼろしの子どもたちとたわむれることのできる人であった。

夫人が不在のとき、グリーン・ノウの館はかりの住居となる。女主人が帰ってくると、館は、子どもらにとって「本のの家」となった。

グリーン・ノウは、それ自体「母のイメージ」でとらえられる場所である。しかし、オールドノウ夫人の存在があつてはじめて、その「母性」は完成されるのである。



さて、私どもは、今、「グリーン・ノウの物語」というファンタジックな世界を、のぞき見ることを試みている。人もものも、すべてにとつて「本ものの家」と感じられる場所がそこにはあった。このシンボリックな物語から、私どもが学びとれるものは決して少なくはないと思う。

(お茶の水女子大学)

☆グリーン・ノウ物語

L・ポストン 亀井俊介訳 評論社発行

### 日本保育学会第27回大会のお知らせ

#### 日程・会場

五月十八日(土)

一〇・〇〇 シンポジウム、島根県民会館

一四・〇〇 研究発表、島根大学

五月十九日(日)

九・三〇 研究発表、島根大学

一五・〇〇 公開講演、島根県民会館

#### 参加

だれでも参加できます。(当日会場で参加費八〇〇円を納める)

#### プログラム

当日会場で入手できます。事前に入手したい場合は印刷実費と送料一五〇円(切手可)をそえて、左記へ申し込んで下さい。

松江市西川津町・島根大学教育学部 幼年期教育研究室内

日本保育学会27回大会準備委員会